

# 桜

五年

筆順  
フン

桜  
オウ  
さくら

成り立ち



もとの字は「櫻」です。「嬰」と「木」とを組み合わせて作った字です。

嬰は、桜貝で作った「首飾り」を表した字です。女の人にするものだから、「嬰」と「女」とで作られました。

桜貝は、桜の花びらを思わせるので、この名がつけられました。「櫻」という字は、その反対に、桜貝のような花びらをもった木なので、この字が作られました。

「櫻」という字は、中国で作られた字であるが、それは「さくら」を表した字ではない。中国には「さくら」は無いから当然である。その字の成り立ちから、わが国の「さくら」を表すのにふさわしい字として早くから用いられるようになった。」

▽桜は日本を代表する花です。ですから「花見」と言えば、桜の花を見る「観桜」のことです。菊や梅を見るのも「花見」と言ってもよさそうですが、そうは言いません。昔は、花と言え梅をさしていた時代もありました。けれど、いつごろからか、日本人は、散りぎわのきれいな桜を一番愛するようになったのです。

使い方

▽観桜（桜の花を觀賞すること。花見）

▽桜花（桜の花）

▽桜色（桜の花の色。淡紅色）

▽八重桜（八重咲きの桜。山桜の変種。花より先に葉が出て、濃い色の花が、他の桜より遅めに咲きます。）

▽山桜（山に咲く桜。葉と花がいつしよに咲きます。）

▽葉桜（花が散って、若葉が出はじめたころの桜）

▽夜桜（夜になってから見る桜。「夜桜見物」には、ちょうど良い夜だ」などというふうになり、つかいます。）

▽桜湯（桜の花を漬けたものに湯をかけたもの。お祝いの席で、お茶のかわりに飲むものです。）

# 恩

五年

筆順  
フン

恩  
オン  
オン

成り立ち



困いの中に身を寄せている形を表した「困」と、心臓の形を表した「心」とを組み合わせて作った字です。

「心をよせる」という意味の字で、「人に心をよせて、めぐみをつくしむ」心（なさけの心）を表した字です。例恩愛、恩恵、恩情、恩顧。

また、「人から受けためぐみをつくしむ心」に「かんしやする心」の意味につかわれます。例忘恩。

六六二

五年

使い方

▽わたしたちは、周囲のさまざまな人や物から、大きな恩恵を受けて、生きています。太陽や水や空気から始まって大小さまざまなもののおかげで、生きることができのです。中でも、わたしたちを育ててくれた親の恩は、忘れることができません。

▽報恩（報い）ということは大切なことです。昔話にも「鶴の恩返し」や「浦島太郎」など、恩返しにまつわる話はたくさんあります。人間、忘恩ということが一番はずかしいことです。

熟語例

▽恩愛（他人をめぐみをつくしむ心。また、親子や夫婦の間の愛情を言います。）

▽恩恵（めぐみ。いつくしみ）

▽恩情（めぐみをつくしむ心。情）

▽恩顧（情をかけて、引き立てること。「日頃のご恩顧に感謝して粗品をさしあげます」などと、つかいます。）

▽報恩（恩に報いること。恩返しをすること。）

▽忘恩（受けた恩に感謝することをしないこと。恩を忘れること。）

六六三

五年